

鐘楼

報国寺の本堂の正面に位置する鐘楼は、寺の境内の中で唯一伝統的な藁葺き屋根となっている建造物です。本堂も以前は藁葺き屋根でしたが、1923年の関東大震災で本堂を含めて寺のほとんどの建造物が破壊されてしまいました。その後の寺の再建時に、本堂は瓦屋根となりました。しかし、特徴的なアーチを描き最上部には何列か瓦が配されている鐘楼の藁葺き屋根を見れば、本堂の元々の屋根がどのような外観であったのかを窺い知ることができます。

報国寺の鐘は第2次世界大戦中に接収されて溶かされてしまいましたが、戦後新たな鐘が鑄造されました。この鐘は伝統的には、1日を通して仏教のお勤めの時間を知らせるために使われていましたが、報国寺の周辺が住宅地となったことから、今では特別な機会にのみ鳴らされています。例えば、新年を迎える儀式では、真夜中に108回鳴らされます。これは、仏教において人間が苦しむと信じられている108の煩悩に対応しており、新年を新鮮な気持ちで迎えるためのものです。

鐘楼の隣にある報国寺の墓地には、樹齢300年と考えられている銀杏の木が生えています。秋になると、鮮やかな黄色の落ち葉が地面に絨毯のように広がります。春には、近くの桜やツツジが咲いて、一帯を様々な濃さのピンクに埋め尽くします。